

あいづわかまつ 文化財だより

発行
会津若松市教育委員会

編集
会津若松市教育委員会文化課
〒965-0871 会津若松市栄町5番17号
☎0242-39-1305

第17号
平成22年4月1日
(2010)



院内御廟歴史散策会（平成21年7月20日）

「院内御廟」は、全国に数多く存在する大名家の墓所のなかでも、大きさや形態などが特に優れた国指定史跡の文化財です。散策していると、その歴史や価値、さらには郷土の歴史や文化財保護の大切さが感じられます。

散策会には親子連れなど約100人が集まり、職員から院内御廟のつくりや亀石のいわれなどを熱心に聴いていました。今年度も夏休み期間に実施する予定ですので、ぜひ歴史学習・郷土学習の場としてお出かけください。

文化財 ニュース



神指城跡の二ノ丸を囲む土塁の上にそびえる国の天然記念物「高瀬の大木（ケヤキ）。約600年の間、会津若松市の歴史を見守ってきました。

会津若松市内にはたくさんの文化財があります。文化財は、長い歴史のなかで生み出され、今日まで大切に伝えられてきた財産とも言えます。会津若松市を理解するためには欠くことのできない文化財を、さらに後世へ伝えていくために、市では保存のための取組みを行っています。

今回紹介する文化財の年代

時代	年代	おもなできごと 会津のできごと 今回紹介する文化財
旧石器	約30,000前	笹山原遺跡群（湊町）に生活の痕跡が残される
縄文	約20,000前	赤井谷地の泥炭堆積が始まる
	12,000前 4,000前	土器が作られ始める 小谷遺跡で住居が作られる
弥生	前300	米作りが始まる
古墳	3世紀後半	大型の古墳が作られ始める 会津大塚山古墳が作られる
飛鳥	645	大化の改新
奈良	710	平城京に都を移す 郡山遺跡に建物が立つ
平	794	平安京に都を移す
安	964	八葉寺阿弥陀堂の建立
鎌倉	1192	源頼朝が征夷大将軍となる
室町	1338	足利尊氏が室町幕府を開く 大般若経が自在院の什物となる
安土桃山	1585	豊臣秀吉関白となる
	1600	上杉景勝が神指城築城に着手する
	1603	徳川家康が征夷大将軍となる 若松城跡御三階がつくられる
江戸	1643	保科正之が会津藩主となる 建福寺が現在の場所に移る 小松彼岸獅子が伝えられる 院内に藩主の墓が作られる 御薬園が整備される
	1801	日新館に天文台が建てられる
明治	1867	大政奉還、王政復古の号令
	1868	鳥羽・伏見の戦い

神指城跡の試掘調査

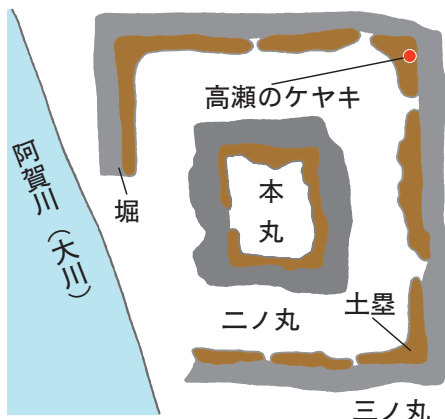
NHK大河ドラマ「天地人」で注目を浴びた直江兼続が総奉行となり、上杉の新たな居城として築城が開始された神指城跡の試掘調査を行いました。

慶長三年（一五九八）、上杉景勝が越後春日山城（現在の新潟県上越市）から会津百二〇万石の領主として移ってきました。景勝は領内整備を進めながら、慶長五年（一六〇〇）、若松城（鶴ヶ城）から北西方向にある神指村に新たな居城の築城を開始しました。

ところが、徳川家康による上杉征伐が開始され、わずか三カ月ほどで造りかけのまま工事が中断されました。その

間に石田三成が決起し、その後の「関ヶ原の戦い」へと展開します。この動乱の時期の日本の歴史に深く関わったのが神指城です。

城跡には樹齢約六〇〇年といわれる国の天然記念物「高瀬のケヤキ」がある二ノ丸北東部分の土塁をはじめとして二ノ丸を囲む土塁が四カ所、近年遊歩道が作



神指城のつくり（築城当時）

今は二ノ丸四隅の土塁と本丸跡が残っています。

られた本丸跡などが現在も残っています。城跡周辺では昭和四〇年代に「ほ場整備」が行われました。この工事が以前は、二ノ丸を囲む土塁がほぼ完全な形で残っていたことが航空写真などの資料からわかっています。

今回の試掘調査では、二ノ丸周辺の堀跡、東辺の堀跡と土塁を確認することができました。堀跡は幅約四十五メートルあり、それらに比べて深さは一メートルから二・五メートルととも浅く、また堀の底の深さに違いがありました。一ノ丸を巡る堀は、未完成のまま工事が中断したと考えられます。

掘の内側には土塁と呼ばれた高い土手が作られました。場所によってそれぞれ違いがみとめられました。このことから、築城の担当者が場所によって割り当てられ、担当者同士を競わせて造らせる「割普請」という方法がとられていたことがうかがえます。

神指城跡は、造られた時期、築城者、工法などの歴史を知ることができ、「つくりかけの城」として貴重な文化財であると考えられます。



神指城跡現地説明会

10月4日には、試掘調査中の神指城跡を紹介する現地説明会を行いました。たくさんの市民の方が神指城跡を歩いて、その規模の大きさを実感することができました。

調査で確認された堀の跡をのぞきながら、担当者から説明を受け「つくりかけの城」を目の当たりにしました。

今回紹介する文化財マップ



国天然記念物「高瀬の大木(ケヤキ)」樹勢回復を目指して

近年、「高瀬のケヤキ」の樹勢が弱まってきており、市では複数年に分けて樹勢回復事業を行っています。

作業は、樹勢に影響を及ぼしにくい二月から三月にかけて行い、一年目は枝補強、腐朽部処理、傷口整形処置のほか、枝の重みによる幹割れを防ぐために支柱

一基を新たに設置しました。また、多くの見学者が訪れ、地面が踏み固められてしまっているため、土壌改良も併せて行いました。土壌改良は、ケヤキの負担にならないよう複数年に分けて行います。また、二年目は見学者用の木道を設置する予定です。

発掘調査レポート

平成二十一年度に行われた遺跡の発掘調査について紹介します。

若松城跡御三階

若松城跡本丸に復元計画のある「御三階」について本来の姿を確認する調査をおこないました。



公園整備の際に作られた御三階の石垣。

昭和二十四年、若松城の本丸内に競輪場が設置されました。この時、御三階の石垣が工事とともに撤去されました。のちに、公園として整備した際、古絵図を参考に位置を推定して、左の写真にある石垣が復元されています。



写真左側に見える小さな石の並びが石垣の基礎部分と考えられます。

調査は、既存の石垣を解体・撤去することから始まりました。つぎに石垣内部を掘削したところ、西側の三分の二は競輪場のバンクにより壊されていたが、残りの三分の一に石垣の基礎部分と考えられる敷石遺構を確認することができました。

今回の調査の結果、御三階の本来の位置のほか、これまではつきりしなかった競輪場のバンクを確認できたことについて、若松城跡の変遷を考える上ではとても貴重な成果です。

探しています

御三階の復元のため写真や図面を収集しています。お持ちの方は文化課までお知らせください。

【収集内容】

- ①競輪場建設前の御三階石垣の状況がわかる写真等
- ②競輪場建設前の本丸内部の状況がわかる写真等
- ③競輪場の建設状況がわかる写真等
- ④現在の御三階の状況と異なる写真等

郡山遺跡

今から一、二〇〇〜一、三〇〇年前の、奈良・平安時代の会津郡役所跡と考えられている遺跡です。

河東町の西部に位置する郡山集落周辺に広がっています。現在で例えると市役所のような機能を持つ種類の遺跡で、当時の会津郡の政治の中心であった可能性があるため、その内容を確認することを目的として、年度ごとに計画的な調査を進めています。

平成二十一年度は、郡山集落の東側から北東側の範囲を調査しました。その結果、東



丁寧に作業が進められた調査

側では集落の外には遺跡が広がっていないことが確認されましたが、北東部には建物の柱跡などが多く発見されました。中でも注目されるのは、柱跡が一行に並んで発見された



集落の北東側に確認された柱穴。(赤くマークされた箇所。) 柱穴は一行に並んでいるのがわかります。この柱穴が何を意味しているのか、今後の調査成果が期待されます。

ことです。今まで調査された他の地域の役所跡の例では、一辺五〇〜六〇mの四角形に堀などで取り囲み、その区画した中に建物を配置することが一般的です。

今回発見された一列の柱跡はこの堀跡である可能性が高いと考えられます。また、柱跡の列で区画された中に建物跡も数棟確認されました。

今回調査した外側にも、その痕跡は広がっているため、今年度も引き続きその周辺を調査する予定になっています。調査が進むことにより、さらに詳しい建物配置や大きさ、建物が使われた年代などが明らかになることでしょ

小谷遺跡

大戸町小谷地区にある縄文時代中期から後期（約三〇〇〇年前）の遺跡です。

遺跡は、阿賀川でできた段丘の上にあります。縄文時代の集落としてはとても住みやすい立地であることと土器の破片が多く拾えることから、古くから遺跡があるだろうと推測されていました。この地域で「ほ場整備」工事が行われるため、それに先立って発掘調査を実施しました。

今回の調査では、工事で影響が及ぼされる範囲を対象に行ったため、調査面積は約二



白い斜線の部分が土石流の後に堆積した土です。多量の土砂が積もっています。



新しい発見にワクワクしながらの発掘調査です。

三〇㎡と狭小でしたが、堅穴住居跡や土坑、土器を地面に埋めた場所などの生活の跡が確認されました。また、縄文土器や木を切るための磨製石斧などの生活道具も見つかりました。

特に目を引いたのは、厚さ三層にも及ぶ山砂と碎石が幅広い範囲で堆積していたことです。詳細な時期は不明ですが、堆積状況などから、古代から中世にかけて発生した土石流により短期間に埋没したものと考えられます。

このように、文献や伝承のない時代に発生した災害の痕跡を実際に確認できたことは、地域の災害の歴史を考える上で貴重な成果でした。

歴史とのふれあい

横須賀市歴史団体

との交流研修



会津藩の歴史講演に熱心に耳を傾けました。

本市と横須賀市の友好都市締結（平成十七年四月）を契機として、両市の歴史団体交流会が実施されています。二十一年度は、十一月四日に「横須賀開国史研究会」の皆さんが来若し、北会津支所ピカリオンホールにおいて、「会津藩の江戸湾警備」をテーマに講演会や意見交換が行われ、充実した交流となりました。

会津藩の江戸湾警備とは
文化七年（一八一〇）、幕府は領土的な野心を含んで国交を求めてくる外国船に対抗するため、蝦夷地警備の実績を高く評価された会津藩に江戸湾警備（三浦半島の湾岸警備）を命じた。
遠方への長期出兵のため家族同伴が許され、観音崎、久里浜、城ヶ島に砲台と陣屋が建設された。この江戸湾警備は十年に及び、派遣された藩士や家族の墓が、現在も横須賀市や三浦市などに残っている。

ふくしま里帰り展

く発掘された ふくしまの江戸藩邸

昨年十月一日（木）から七日（水）まで、（助）福島県文化振興財団まほろん主催による巡回展が市文化センターで開かれました。

江戸時代には、各藩の屋敷が江戸にも置かれていました。近年の開発でそうした江戸藩邸の発掘調査が進み、今回は会津藩中屋敷跡（汐留遺跡）と二本松藩上屋敷跡（溜池



江戸切絵図から会津藩の屋敷の位置を探し出す見学者。

遺跡）から出土した陶磁器などを東京都から借りてお披露

目しました。

同時に、市内の武家屋敷跡や若松城の発掘調査で出土した生活道具もあわせて展示し、江戸時代の武家文化に触れられる機会となりました。

展示で好評だったのは、数畳分もある巨大な江戸切絵図や会津藩中屋敷跡から出土した受水枧及び木樋（当時の上水道設備）でした。

受水枧と樋は、平成九年に東京都埋蔵文化財センターから譲り受けました。その大きさや、受水枧に込められた当時の職人の高い技術力は多くの入場者の目をひいたようでした。

文化財を守り、直し、伝える

文化財にはいろいろな種類のものがあります。状況に応じて、未来へ残し伝えるために所有者・市・市民が協力しながら整備しています。

「院内御廟」の修復

国指定史跡「会津藩主松平家墓所」では、修復が必要な場所について計画的に復元を行っています。

墓域は一四・八ヘクタールに及び、二代藩主以降の歴代藩主とその家族が埋葬されています。二代正経のみが仏式であるほかは、歴代藩主が神式によって葬られているのが、大きな特徴です。墓の石造物以外に墓域内には、石畳や石段、石垣などが造られており、江戸時代を通じて藩の大規模な土木工事事業として取り組まれていたことがわかります。

平成十九年度からは、藩主の墓の周辺に築かれた石垣を中心に修復してきました。二十一年度は、四代藩主容貞の墓周辺の石垣を対象として修



石垣積みには現在でも職人の技が光ります。

会津藩主松平家墓所の配置図



復元しました。復元工事では、江戸時代の石垣積みの手法を細かく記録しながら、往時の姿を取り戻しています。工事によって、当時の会津藩の石垣の積み方や土木技術を知ることができま

今後も、訪れた方に会津藩の歴史の新たな魅力を感じてもらえるよう、整備を進めていきます。

赤井谷地

― 遮水板の設置 ―
国天然記念物「赤井谷地」の乾燥化を防ぐため、湿原回復措置を行っています。



谷地からの水の流出を防ぐ場所に設置しています。

国指定天然記念物である赤井谷地において、追加指定を受け、市で買上げた旧耕作地の回りに掘られている小水路に、遮水板を設置しました。これは、乾燥化が進んでいる谷地の、湿原回復措置の一



旧耕作地

環として行ったものです。現在、谷地西側の水を強清水側に流出している新四郎堀の付替え工事が進行中ですが、今回遮水板を設置した小水路は、谷地内の水を集め、新四郎堀に排出してしま

た。新四郎堀の付替え工事は、今年度で終了する予定ですが、小水路の水を止めたことにより、谷地内の湿原化が大幅に図られることになり、将来、植生も徐々に回復していくことでしょう。

赤井谷地とは

赤井谷地の成り立ちは、磐梯山や猫魔山の火山活動に密接に関係します。

約4万年前の火山活動で、猪苗代湖の水が堰き止められたことにより、赤井谷地周辺も水没し、猪苗代湖と一体の湖となりました。

その後、約2万年前に猪苗代湖の水位が現在とほぼ同じになり、赤井谷地も陸化しますが、湿地であるため、その上に泥炭が徐々に堆積しました。現在では、3m以上の泥炭がドーム状に形成されています。

その独自性は植生にもみられ、約200種類が生息している植物のうち、38種が樺太と共通の北方系の植物です。これは、氷河期に南下した植物が氷河期を過ぎても赤井谷地に残ったために起こった現象です。

文化財 防火デー

毎年、文化財防火デーの日を中心に防火訓練と防火査察を実施しています。五十六回目を迎えた今年は、一月二十四日（日）に河東町広野字冬木沢にある国指定重要文化財「八葉寺阿弥陀堂」にて防火訓練が行われました。



八葉寺阿弥陀堂の防火訓練は、所有者や地域の方々、消防機関と連携して行いました。

一月二十六日は、昭和二十四年に法隆寺金堂壁画が焼損した日にあたります。昭和三十年にこの日を「文化財防火デー」と定め、貴重な文化財を火災などから守るために、消防機関と所有者や地域の方々、そして文化財関係者が連携・協力して、この日を中

心に全国的に文化財防火運動を展開しています。

「文化財防火デー」を機会に、貴重な国民的財産である文化財への理解と愛着を深め、地域の文化財を後世へ保存・継承していくことの重要性を考えていきたいと思います。

文化財紹介

市指定有形文化財
能面(6点)

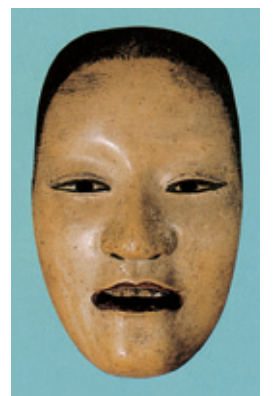
会津若松市の歴史が感じられる文化財2件を紹介します。



(上の写真)

昨年9月23日、会津能楽堂で催された薪能。市では、伝統文化に触れる施設として能楽堂の貸出しをしています。問い合わせ：文化課文化振興グループ(右の写真)

指定文化財6面のうちの「深井」。銘が残っていませんが、彫り方の技法などから相当の作者とされます。



会津藩では、藩主をはじめ、家臣、城下の町家にまで広く能楽が愛好されてきました。明治十一年(1878)には、演能に必要な能装束等を購入する目的で「和楽講」が結成されました。この講では明治年間で相当数の装束、

面等を購入しています。これらの装束や面は現在の会津能楽会に受け継がれました。その中でも優品とされる六面の能面が指定されています。昨年八月十九日、会津能楽堂建設協会から市へ「会津能楽堂」が寄附されました。こ

の能楽堂には、指定の能面以外にも演能に必要な装束が保管され、会津で代々伝わってきた能文化を体感することのできる施設となっています。今後は、新たな伝統文化の発信場所としても期待されます。

表彰

地域伝統
文化功労者

小松獅子保存会

「小松彼岸獅子」は、江戸時代に関東から伝えられたと言われており、市の無形民俗文化財に指定されています。



このたび、「小松獅子保存会」が、財団法人伝統文化活性化国民協会よりその活動を評価され、地域伝統文化功労者として表彰されました。三月十八日には、県教育長室において表彰伝達式が行われました。会長の斎藤実さんは「これからも地域一丸となって取り組んでいきたい。」と話していました。

銀山街道

元和元年(1615)、軽井沢村に銀山が発見されました。この銀を若松城下へ運ぶため整えられたのが「銀山街道」です。

現在でも街道沿いには道標など当時の面影の残る文化財が点在しています。特に宿場が設けられた北会津町下荒井



柳津町に残る製錬所の煙突。明治時代のものです。

の家並みからは、街道沿いの雰囲気を感じ取れます。